

連載⁰⁹

内海善雄の
(ITU元事務総局長)

やぶ睨み
「ネット社会」論

グローバル時代に、 日本に歩んでほしい道⑤「景観」

が、車が代官山（東京都渋谷区）あたりに来ると、ほっとする。代官山は、東京では最も美しい街並みと言われるが、ヨーロッパでは普通の景色だ。

しかし、日本の街並みは、決して昔から汚いわけではない。倉敷（岡山県）や妻籠（長野県）など、歴史的景観地区として保存されているところは全国にたくさんある。かつての日本の街並みはこんなに素晴らしいものだったのかと誇りに思う。なぜ、現代の日本の街並みは汚くなったのだろうか。

人間、食欲や金銭欲などある程度基本的な欲求が満たされると、次に求めるものは美しさである。衣服、調度品、住居、そして街並みと、身近に接するものすべてに美しさを求めるようになる。

しかし、衣服や調度品、住居と街並みとの間には大きな壁がある。前者は自分が支配・所有しているものだから、惜しみなく金を使すが、街並みは自分だけで支配するものではない。共同意識や公德心がなければ人はそのようなものに投資をしない。

このように考えると、昔の日本の街並みが美しかったのに、戦後醜くなった原因が理解

できる。街並みが良くなるためにはいくつかの条件が整う必要があると思う。第一に、住民がある程度生活に余裕があり、街並みをきれいにしたいという欲求を強く持つこと。そして近隣と協力し合う間柄になっていること。さらに、街並みのために金を負担し、土地利用や建物建設の制限を受け入れる用意があることではないか。

皆が、がむしゃらに自己の利益追求をして必死に生きてきた戦後の日本には、残念ながらこのような余裕や、成熟したコミュニティはなかなか存在しなかった。そこで、街並みを商売のタネにする観光地や、きれいなビル群の建設で経済効果が期待できる大都市の再開発など、ビジネスモデルが成り立つ所では、例外的に美しい街が形成された。

ソフトパワーを削ぐ日本の街並み

国際政治学者ジョセフ・ナイは、ソフトパワーの重要性を説く。その国の文化や政治的価値観、政策の魅力などに対する支持や理解共感を得ることにより、国際社会からの信頼や、発言力を獲得する力のことである。武力や経済力のハードパワーに対比される。

先日、ボランテニア・ガイドに広重の版画でも有名な横浜市の金沢八景を案内してもらう機会があった。地方出身の筆者は、金沢八景はその名称通り風光明媚なところだと信じていた。ガイドは錦絵や古い写真を見せながら、かつての金沢八景の素晴らしい海岸や周囲の風景を熱心に説明してくれた。しかし、雑多なビルや電柱、歪な道路、モノレール、工場などから昔の姿は想像すらできなかった。乱開発によりこのような醜い街並みと成り果て、ロマンチックな駅名のみが空しく残ったのだ。

街並みは民度の表れ

先進国の中で日本ほど街並みの汚い国はないと思う。ジュネーブに在住の折、日本に一時帰国すると、あまりの醜さに憂鬱になった



オフィス街も日本のソフトパワーになる(丸の内仲通り)

すぐに思いつくのがフランスである。人口や経済力は日本より劣るが、国際社会での発言力ははるかに勝る。まさに、栄光ある歴史とLa culture française(フランス文化)のなせる業である。

日本のソフトパワーは一体何だろうか？ 伝統文化や漫画、アニメなどのポップカルチャーがよく挙げられるが、筆者は、憲法九条や自国企業を使わないODAだと思っ

加えて、大手町、日比谷などのオフィス街や、銀座や青山通りなどの一流ブランドショップが立ち並ぶ美しい地域、また、全国に存在する歴史的景観地区は、清潔できれいな高い文化の国として、立派なソフトパワーといえよう。

しかし、それ以外の一般的な生活空間に一

歩入れば、乱雑なビルやガードレールに歩道橋と、とても先進国とは思えない風景だ。さらに、旧来の住宅地に進むと狭い路地に木造家屋やビルが乱雑に並ぶ。来訪した観光客、特に街並みのきれいな欧米からの観光客は、日本の街並みの醜さに幻滅して帰るに違いない。このような醜い日本の街並みは、逆に日本のソフトパワーを大きく削ぐものではないだろうか。

人は「馬子にも衣装」ではないが、みすばらしい身なりや振る舞いしかできない者を軽く見る。国家も同じで、恥ずかしいような街並みの国は、それなりの民度の国と見られる。今の「観光立国」は、実は、単に一時的な経済利益を得ているだけで、自らを貶める結果になっているのかもしれないのである。

税金の投入と美観のための規制

グローバル時代には、「美しさを求める贅沢のためには税金は使えない。私権も制限できない」という伝統的な考え方から、「ソフトパワー強化の観点からも、美しさのために税金を使い、私権を制限する」に発想を換えるべきである。

郊外のニュータウンがきれいな理由は、看板、ガードレール、電柱、横断陸橋などがあって、建物の外観がある程度そろっていることにある。ガードレール、横断

陸橋、看板、電柱と、美観を損ねるものを取り払うだけでも、街は相当美化されよう。ガードレールや陸橋は、そもそも必要のないところも多いが、必要ならば美しいものに取り換える。看板の撤去は、美化運動が高まれば理解されるだろう。無電柱化は、災害対策上からももっと強力で推進すべきである。これらの施策に積極的に税金を使おう。

高さや外観が不ぞろいの建物については、建て替えを待つしかない。その際、美しい街並みから得られる利益をいくら説いても、我欲を追求する個別の施主は、「総論賛成、各論反対」で、自主的な協力は期待し難い。新たな規制もやむをえない。

具体的には、安全性や日照権などが主眼の建築基準に、条例などで建物の高さや外装、形の規格化などの美的観点からの規制を積極的に導入することである。日本の建物は幸いに数十年もすればすっかり建て替えられる。街並みの美観追求はそんなに長く待つ話ではない。



内海善雄(うつみ よしお)

1942年香川県高松市生まれ。東大法学部卒。東芝を経て66年郵政省(現総務省)入省。電気通信の自由化など、通信放送政策を長く担当。98年国際電気通信連合(I・T・U)事務総局長就任。通信・電力・自動車関係企業や各種団体の役員、大学教授などを歴任。IEEE名誉会員。